

## 29【P2】Ⅱ-267

ケニアの医療に関する史的考察

○牧 純<sup>1</sup>, 久米 光<sup>2</sup>, 桑田 正広<sup>3</sup> (<sup>1</sup>北里大医微生物・寄生虫学, <sup>2</sup>北里大医病理学, <sup>3</sup>北里大医生化学)

[序論]アフリカの保健医療の史的な理解と把握の手始めとして、現在でも伝統医療と近代医療の併存すると思われるケニア共和国に着目した。今回は演者らが同国について検討した内容を報告する。[方法]国際協力機構 (JICA) による派遣国ケニアで、薬草採取に出かけた僻地にて、同国の民間療法薬の専門家と密接な連絡をとりつつ、薬用植物による環境感染症対策を立案した際に得られた知見を中心に、帰国後考察した。[結果・考察]現地ではつぎの4つすべてを常に考慮の対象としておく必要があると考えられた。1) 大昔の迷信めいて見えるが、ケニアの現代でも Animism (信仰医療) を真摯に実行している住民が少なくない。2) 漢方医学のように民族の長い間の経験をもとに現実の医療が行われることは同国で決して珍しくない (Empiricism または経験医療)。3) 首都ナイロビの近代病院などにおいては最先端の医療も含めて科学的に正しい方法で行われる診療、Rationalism (科学医療) も当然認められる。4) ギリシアのヒポクラテス以来、患者の立場にたって医療を支えてきた Humanitarianism (人道主義) は先進国において長い間配慮されてきたものであるが、現代のケニアなどに対して行われる国際医療協力も余裕のある国々の苦しい側に対する哲学が基礎となっている。しかし、一般市民の世界では昔からの信仰と経験が“医療”の現場を支配しているので、先進国から優れた医療をケニアのような伝統的な社会に導入する際、うまく調和を図りながら技術移転を進めることが肝要であろう。